思考の環

Opening Essay

枝葉と根幹－奄美史研究から－

「本職の日本古代史も十分でない石上がなぜ奄美史研究を？」などと言われても、私は構わない。それほどに、歴史研究者として、── 奄美史といっても、筆者が学んでいるのは13〜17世紀と幕末19世紀中葉の限られた時期ではあるが ──、奄美諸島の歴史に関心をもっている。

認　識

2003年11月16日の日本復帰50周年記念式典、昨年、NHK-TVで放映された「ジャッジ」、元ちとせや中孝介の歌唱、また黒糖焼酎や大島紬、クロウサギ、そして2004年に各地で展覧会の開かれた田中一村、等々により、奄美諸島は多くの人々に関心をもたれている、と思う。

そして、昨秋出版された、島尾伸三が父・島尾敏雄（1917〜86）と母・ミホ（1919〜2007）を追想する『小高へ』は、著者本人へのインタビューも含め、いくつかの新聞書評欄に取り上げられた。島尾敏雄は、太平洋戦争末期に特攻艇の隊長として加計呂麻島に駐屯していた。島尾敏雄は、妻の故郷奄美に戻り、小説執筆の傍ら、奄美郷土研究会の活動を支えた。

言うまでもないこととは思うが、現在、鹿児島県に属する奄美諸島は、北から喜界島、大島（奄美大島）、大島南端の瀬戸内海峡を挟んで大島と隣する加計呂麻島、加計呂麻島の南西に位置する与路島・請島、徳之島、沖永良部島、そして琉球本島北端を南に望む与論島からなる。だが、奄美諸島が鹿児島県に属することをすぐに答えられる人は、必ずしも多くはない。大学生にしてしかり。そして、1988年に初めて奄美大島に行くまでの筆者にしても、奄美諸島についての知識は、危ういものであった。

1609年

1609年（日本は慶長14年、琉球が朝貢していた明の年号は万暦37年）は、島津氏が琉球を征服した年である。今年は、島津氏の琉球侵略400年にあたる。1609年は、琉球処分の1879年、沖縄戦の1945年、日本復帰の1972年と共に、琉球・沖縄史では忘れられてはならない年である。そして、1609年は、奄美諸島にとっても、島津氏に征服された年として、奄美の戦後の日本復帰の1953年とあわせて知っていてほしい年表知識である。

はたして、奄美諸島が、日本列島中の地域としては、最も複雑な被統治経験を持っていることは、知られているか。７〜８世紀には、奄美諸島は、「南島」の一部として大宰府を通じて日本に朝貢した。９世紀にはいると、交易は継続するものの、日本の政治的羈絆から離れた。

11世紀初頭には、大宰府や九州諸地域との繋がりや交易関係を保ちつつも九州を襲う「奄美人」としても現れる。13世紀には薩摩半島の武士（御家人の千竈（ちかま）氏）の奄美諸島への進出が見られる。

ちなみに、最近では、大島に７〜10世紀の夜光貝集積遺跡である外金久（ふあがねく）遺跡（奄美市）、喜

界島に日本の大宰府の政治・文化の強い影響の見られる10〜14世紀の城久（ぐすく）遺跡群（喜界町）、徳之島に11〜13世紀の南島に広く流通したカムイヤキ須恵器の窯群であるカムイヤキ遺跡跡群（伊仙町）など、琉球にグスク文化が成立する直前、または前期グスク文化並行期の遺跡が発見・調査され、考古学の面から南島史の見直しが進められている。

琉球史書には、1266年に大島が英祖王に朝貢したと記されるが、奄美諸島の琉球国への服属は14〜15世紀に、南端の与論島から北東端の鬼界島へと順次展開していった。鬼界島は、15世紀において数十年にわたり、琉球の侵攻に抵抗した。16世紀には、奄美諸島全域に、琉球本島と同様な間切制度にもとづく琉球国による地域統治体制がしかれた。

与論島には、琉球本島のグスク様式のサンゴ石灰岩による石積みの与論グスクがあり、また沖永良部島には琉球本島や先島に見られる古琉球時代の崖下の掘り込み墓がいくつもある。与論グスクは、規模は小さいが、琉球本島北部の今帰仁城の城郭を想起させる。与論グスクからは、琉球本島北端の辺戸岬が間近に見える。沖永良部島の中央に、永良部世之主の居城と伝承される内城がある。そして内城の西に位置する世之主の墓やチュラドゥール（美しい墓）の前庭部に佇むとき、それらの規模は小さいながらも、首里城の西に位置する琉球王家の墓所の玉陵（タマウドゥン）を思い起こす。

奄美諸島の中でも、その南部の与論島・沖永良部島は、島主や世之主がいたと伝えられ、徳之島・大島・鬼界島より琉球文化の影響が強かったと推定されている。

大島が北端の笠利半島まで琉球に制圧されたのは、15世紀中葉、笠利半島の東に隣する鬼界島が最終的に琉球に服属したのは1466年頃と伝えられる。

しかし、奄美諸島は、1609年には、琉球に侵攻した島津軍により占領され、島津氏の領地の一部となった。ただし、服装や髪形は琉球様式が強制され、中国に対しては琉球の一部として扱われた。

奄美諸島は、薩摩から琉球への途次の島々として、「道の島」と呼ばれた。現在でも、鹿児島から海を越えて沖縄本島那覇にまで続く国道58号線は、奄美大島を貫いている。

奄美諸島は、明治維新後、鹿児島県に編入された。太平洋戦争後、米軍に占領され、1953年12月25日に日本復帰を遂げた。

根　幹

17世紀末に琉球に学んでサトウキビ生産が導入され、18世紀以降、とくに喜界島・大島・徳之島においてサトウキビのモノカルチャーが展開した。

また、奄美諸島は、薩摩藩にとっては、罪人の流刑の地でもあった。西郷隆盛の大島の龍郷などへの遠島は、多くの人の知るところである。明治時代に東京大学史料編纂所の基礎を作った、薩摩藩出身の重野安繹（1827－1910）も、冤罪により、1857〜63年、大島に遠島されていたことがある。重野安繹は、生麦事件で薩摩藩と英国の対立が生じた1862年の翌年の1863年春に赦免され、島津久光の御庭方を務め、同年の薩英戦争の際の英艦隊との交渉の使者となり、つい

で横浜での講和の使者の一員となり、和議成立に貢献した。1864年、鹿児島の藩校造士館助教となり、島津久光の命により史局を開き、編年体史書『皇朝世鑑』を編纂した。

明治新政府の修史事業は、1869年、三条実美を総裁とする国史校正編輯局の設置により、塙保己一が1793年に創設した幕府の和学講談所の跡を利用して始められた。修史事業は、1888年に帝国大学に移され、1889年には国史科が設置され、修史事業と国史教育が帝国大学で推進されることになった。

重野安繹は、1871年、東京に出て文部省に出仕し、75年に修史局副局長となり、修史事業を指導した。1882年からは、久米邦武らと共に漢文体の編年史である「大日本編年史」の編修にあたった。重野安繹は、『太平記』等によらず、古文書に拠るべきことを建議し、1885年より全国古文書調査を開始した。史料編纂の素材とするために、史料原本の所在を確認し、史料を借用し複成（文書・典籍の影写（透き写し）・謄写（見取り写し）、絵画史料の模写）を作成する事業である。編年体を重視すること、古文書を重視することの二点こそは、重野安繹が主導した修史事業の核心であった。

島尾敏雄は、奄美大島にわたり、1958年から1975年まで鹿児島県立図書館奄美分館の館長を務める傍ら、奄美郷土研究会の活動にも参加した。奄美分館には、郷土資料の書架が設けられ郷土研究の中心となった。奄美郷土研究会の活動の成果は、現代の奄美地域史研究の根幹となっている。奄美郷土研究会に続いて徳之島でも徳之島郷土研究会が活動した。

奄美郷土研究会の活動と並行して、名瀬市史が編纂されたが、その前近代史部分の編纂を指導したのは鹿児島大学の原口虎雄であった。原口の研究方法は、文書、一次史料を歴史再構成の根幹とするもので、まさに重野以来の日本史学の方法の伝統にしたがったものであった。名瀬市史編纂委員会の事業の成果は、『名瀬市誌』として刊行されたが、その編纂過程で集積された文書・記録の写しは「名瀬市史編纂委員会史料」として奄美博物館に保存されている。

枝葉から根幹へ

私は、文学部の学生であった時以来、日本古代史を専攻としてきた。日本古代史の研究の方法は、大学以来、指導教授や先輩・友人に教えられてきたし、また、自分なりに古代史料の分析の方法論とか、律令法による支配体制を分析するための方法とかを考えてきた。

そして、友人に誘われて、1988年に、初めて鹿児島短期大学付属南日本文化研究所の奄美諸島学術調査に参加する機会を得てから、奄美史の研究も行うようになった。そのとき、私は、史料編纂所で『大日本史料』の編纂に携わっていた経験から、奄美諸島の編年史料集の編纂を思い立った。重野が歴史学の根幹とした史料に基づく歴史の再構成を、奄美諸島編年史料により体験するという機会を得ることが可能となったのである。

ただし、奄美諸島編年史料といっても、近世の社会経済史や藩政史、また中世・近世の対外関係史の方法の教育を受けたことのない者としてはできることには限りがあり、13世紀から17世紀末〜18世紀初頭のサトウキビ生産の導入の

時期を対象としている。現在、なお不十分なものではあるが、寛永年間まで進んでいる。

歴史研究の目的は、歴史的時空間の事象群・人間群の復原、それに基づく歴史的社会の本質規定にあるといってもよい。そして、復原と本質規定のためには、史料の集積、史料の一つ一つとの接触とそれらの解読が最初の作業となる。ただし、歴史究明の鍵となる史料との接触は、偶然のこともある。

木の葉は、ひとひら（一枚）、ふたひらと数える。古文書で料紙を数える単位も「枚」である。文書は一点が一枚の料紙からなるもの、二枚以上の複数の料紙からなるものがある。比喩的に言えば、個別の史料は葉、史料の群は多数の葉が集まる枝とも言えよう。

偶々、手にした目にした一枚の葉、一片の花弁から、それらが一部をなした樹の全体を観て、幹に触れることもできる。偶々、手にし、目にした一枚の史料から、それを生成した歴史事象群の全体へと遡及することが始まることもある。

私は、鹿児島短期大学付属南日本文化研究所の1989年の沖永良部島の和泊町の調査に参加した時、郷土誌から、東恩納寬惇（1882〜1963年）の『南島風土記』が、琉球家譜の奄美諸島関係記事を紹介していることを知った。重点領域研究「沖縄の歴史情報研究」（1994〜97年度）に参加して、琉球史の研究者と交流する機会を得た。そして、那覇市歴史資料室（現、那覇市歴史博物館）に『那覇市史』の琉球家譜資料の編纂のもととなった膨大な量、数百点の家譜資料が収蔵されていることを知り、1996年から、那覇市歴史資料室、そして東恩納寬惇文庫を所蔵する沖縄県立図書館で、琉球家譜の閲覧を始めた。

はじめは、『南島風土記』に引用された家譜が残されているかを調べたが、その過程で家譜には、奄美諸島のみならず、琉球と薩摩藩・江戸幕府との関係に関わる膨大な情報が記されていることを知った。そのようなことは、琉球史・琉球家譜研究者には周知の事実であったが、断片的に論文を読むのみで、琉球史全体についての教育を受けたことのなかった自分にとっては、新鮮な驚きであった。もちろん、琉球使の江戸上り（徳川将軍継承の慶賀使と琉球王継承の謝恩使）については、横山學氏の研究『琉球国使節渡来の研究』があることは「沖縄の歴史情報研究」に横山氏も参加されていたので知ったし、また同研究で史料編纂所の鶴田啓氏が『通航一覧』のデータベースを作成されたことで知っていたが。

2004年12月26日、沖縄県立図書館郷土資料室で、嘉手納宗徳自筆書き下し本「琉球歴代画家譜」「琉球歴代陶工家譜」を複写した。その翌日か、那覇市久茂地の大型書店の郷土書コーナーで佐藤文彦『遥かなる御後絵　甦る琉球絵画』を入手した。ちなみに、御後絵とは琉球王の肖像画である。同書により、嘉手納宗徳の画家陶工史料集のもとは、琉球美術史研究者であった比嘉朝健（1899〜1945年）の集成した同名史料集であることを知った。

さらに、比嘉の琉球美術史論文は、沖縄県立図書館と那覇市歴史資料室に複写で集められていること知り、比嘉の研究で、近世琉球絵画の祖、欽自了（諱は清豊。1614〜44年）の史料を知った。

2005年８月４日、那覇市歴史資料室で「欽姓

家譜」と「欽姓米須家伝」を見て、欽自了が描いた、寛永17年（1640）に琉球王から島津光久に献上した久米島の馬の絵が尚家に伝えられ、現在、米須家に伝えられていることを知った。

資料室の方から、琉球絵画につき那覇市松山の古美術商を紹介され、その夕方、古美術店を訪問し、1983年に馬の絵が那覇に里帰りしたことがあったことを教えられた。2006年１月31日、那覇市歴史資料室で「欽姓家譜」別本に綴込まれた米須清賢「自了物語集」により、馬の絵の伝説も知った。

さらに、2007年２月１日、沖縄県文化振興財団史料編集室を訪問した際、史料編集室の方から、栗国恭子氏の「鎌倉芳太郎と比嘉朝健－琉球絵画研究の光と影－」（沖縄県立芸術大学附属研究所公開講座、2006年11月25日）の資料の教示を得た（栗国恭子「近代沖縄の芸術研究②－鎌倉芳太郎と比嘉朝健・琉球芸術研究の光と影－」『沖縄県立芸術大学附属研究所紀要』20号、2008年３月）。そこで己の無知を改めて悟ったことが二つあった。一つ目は、自了の馬の絵を、比嘉朝健が『国華』に図版と解説で紹介していたこと、二つ目は比嘉朝健はなんと1927～32年に史料編纂所の職員であったことである。史料編纂所に戻り、『東京大学史料編纂所史史料集』（2001年）編纂で、職員録資料を担当した尾上陽介氏に、比嘉朝健の履歴資料を教えてもらった。さらに無知であったことの三つ目は、史料編纂所に朝健が収集した、28点の琉球金石文の拓本（1941年に購入）があることであった。

2005年８月、那覇市歴史資料室における家譜閲覧で目に飛び込んできたもう一つの情報は、「真姓家譜」真喜屋家に、将軍綱豊から島津吉貴、島津家から琉球の王子や真氏への神當流馬術の伝授が記されていることである。薩摩の馬術など全く門外漢の私は、その場で、友人である鹿児島県歴史資料センター黎明館調査資料室長徳永和喜氏に電話した。徳永氏より、島津家文書に神當流に関する史料が多数あることを教えられた。史料編纂所に戻り、島津家文書の目録を調べマイクロフィルムを見た。比嘉朝健が職員であったことと言い、自分も撮影・DB作成や文化財指定に多少とも関わった島津家文書に琉球への馬術伝授史料があったことと言い、何も知らないからこそ研究できると希望的に反省した。

琉球への馬術の伝授は、幕府・薩摩藩への琉球の服属という外交関係において、重要な要素であった。慶賀使は、貢物として琉球馬を将軍に献上する。その馬を牽くのは圉師で、首里王府の厩の御別当が務めた。江戸上り行列図に圉師と貢馬が描かれている。真喜屋家は、代々、御別当を務めた。琉球本島にも馬は多数いたが、貢物とする馬は御別当らにより宮古・八重山より徴発された。馬の貢上は、服属の証となる儀礼であり、琉球王にとって自らが統治する先島から貢馬を徴発することは重要な政治的儀式であった。馬術伝授は、正当なる馬術を伝授することにより、服属儀礼としての貢馬を制度化するための文化装置であったといえよう。

かくして、私は、一幅の自了の馬の絵、「真姓家譜」の一丁（ひとひら）の記事から、琉球と徳川幕府や薩摩藩との政治関係の根幹に関わることを知る。

枝葉に目をとめることが根幹に触れる始まり

となる。偶然に知った情報の一片から、歴史の必然・本質へと辿るところに歴史学の道があると、研究生活40年にして思う。このような経験は、これからの私の古代史研究・奄美諸島史研究にも活かされるであろう。

参考文献

「奄美諸島史を学ぶ」(『歴史の風』、刀水書房、2007年)、「南島雑話とその周辺」『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』29号（2005年 4 月）以下に連載中。

石上　英一（いしがみ　えいいち）

1946年生れ。
［**専攻領域**］日本古代史、奄美諸島史
［**著書・論文**］
『古代荘園史料の基礎的研究』『日本古代史料学』など
［**所属**］東京大学大学院情報学環、（兼）史料編纂所